

Chiorin!

http://jeso.jp/

第11号 (2013年11月)



インド大会で金1・銀3

金の安藤選手は気象・海洋科学部門賞も

大会規模は歴代2位

インド大会に選手を派遣したのは、23の国と地域で、参加選手は90名。参加した国と地域数は過去最大だった第5回イタリア大会(参加国・地域数26)に次ぐ、歴代第2位の規模となった。今回が初参加となったのは、オーストリア、バングラデシュ、ナイジェリアの3ヶ国。その他は、アメリカ、インド、スペイン、韓国、ブラジル、ルーマニア、イスラエル、インドネシア、カンボジア、スリランカ、台湾、フランス、ロシア、イタリア、ウクライナ、クウェート、タイ、ドイツ、ベラルーシ。また、選手を派遣しないオブザーバー参加は、キルギスタン、マラウイ、アルゼンチン、マレーシアの4ヶ国であった。



表彰式後の記念撮影(9月19日、インド・マイソールにて)

9月11日から19日の日程でインドのマイソールで開催された、第7回国際地学オリンピックインド大会で、日本代表は金1、銀3の好成績をおさめた。日本の金メダル獲得は4大会連続。メダル全員獲得は初参戦以来6大会連続。金メダルを獲得したのは、安藤大悟選手(灘高3年)。銀メダルは桑原佑典(開成高3年)、安河内健志朗(栄光学園高3年)、八幡幸太郎(筑波大学附属駒場高3年)の各選手。安藤選手は、気象・海洋科学部門トップとなり部門賞を受賞した。

日本選手団は、10日に日本を出国。12・13両日には、メンター達が問題作成・翻訳を行っている間、マイソール市内や近郊の寺院などを訪れ、インドの歴史と文化に触れた。試験は14日に筆記、15日に実技が行われた。16日は国際協力野外調査(ITFI)を実施。17日にITFIの発表会などを行った後、18日

には現地の学校を訪問するなど、各種行事に参加した。

日本以外の金メダルは韓国と台湾が3個。イタリア、タイ、ルーマニアが1個。タイとルーマニアは銀メダル数が日本と同じで、3位を分け合った格好。総合成績第1位はタイの選手が獲得した。

日本選手団を率いた団長の久田健一郎地学オリンピック日本委員会理事長は、「選手の活躍は相変わらず素晴らしく、日本は常勝国である韓国や台湾に続く地位を確保している」と指摘。強豪の一角に定着しつつあることに、自信を示した。

また、「会場は非常に立派で快適そのもの。そのお陰で、生徒達は競技に集中できて、普段の実力を発揮出来たのではないか。インド大会の関係者には深く感謝したい。」と述べた。

なお、今回のメダル授与総数は56個で、内訳は金10、銀18、銅28。



次回大会はアメリカ

来年の第8回大会はアメリカ合衆国のバーモント州で7月26日から8月5日に開催されることになった。バーモント州はアメリカ北東部、ニューヨーク州やカナダのケベック州などに隣接し、面積は全米50州の中で45位、人口は僅か61万人でワイオミング州に次いで2番目に少ないこぢんまりとした州である。会場となるバーモント大学は、学生数約1万2千人の州立大学で、創立は1791年の伝統校である。大会日程は例年より1か月ほど早く、効率的な研修日程を検討していくことになりそうだ。

【今号の誌面】日本代表の感想(2面)。インド大会レポート・文科大臣に表敬訪問(3面)。リレーエッセイ(4面)。

国際交流を楽しんだ 10 日間

世界に羽ばたいた日本代表選手たち

伝わったもん勝ち

今回地学オリンピックの代表に選ばれたとき、最初に心配したのは海外の人と英語でコミュニケーションがとれるのかということだった。代表選抜を受ける中で私は日本人の中でさえ英語が出来ない方であることが発覚したのに、ネイティブも混じる中でやっていけるのか？

IESO に参加して、実際に英語に不自由することのデメリットに直面した。何か尋ねられて言葉に詰まってしまうことも多かったし、特に専門用語が絡んでくる ITFI においては自分の意見が十分に伝えきれず悔しい思いをした。外国人はネイティブでなくとも流暢に英語を操る人が多く、自分のふがいなさを痛感した。だが、そのような問題だらけの中でも何とか意思疎通できたというのは大きな収穫だった。もちろん単語を言うだけの英語しかできないのはまずいだろうが、それより大事なのは会話をしようという意志だと感じた。

文法が間違っていようが伝わったもん勝ちだし、聞き取れなくても聞き返すことも出来る。発音も悪かったとは思いますが聞き取ってくれないということはほとんどなかった。とはいえ全体としてみれば英語が不得手であることは大きなハンディとなっていて勉強の必要性を思い知らされ、今後の英語学習へのいいモチベーションとなった。

安藤大悟
(灘高等学校 3 年)

価値観を共有できた

試験について、一番印象に残ったのがそのスケジュールの厳しさです。体力も必要なんだなということを実感しました。試験 1 日目の筆記試験は、固体地球・地質科学分野は比較的容易だったものの、天文・地球惑星科学分野は非常に難解で、心が折れそうになりました。試験 2 日目は実技試験だったのですが、朝か

ら晩までひたすら問題を解き続けたので大変疲れました。

ITFI は、積極的に参加することができました。自分の意見を伝え、反映させることができたので満足しています。Research Project と題した調べ学習活動でも、ネット調査やポスターの色塗りを担当しました。

今回、自分が大会に出て得られたもっとも大きな収穫は、現地で作り上げることでできた人間関係だと思えます。様々な国の生徒と ITFI や Research Project のみならず、いろんな場面で親交を深めることができました。大会終了後もネットを通じて交流を続けようと思っています。彼らはかけがえの無い友達です。自分と同じような分野に興味のある人も多く、拙い英語ながらも話が弾み、様々な価値観を共有する事ができました。英語に関して過剰に心配する必要は無いと思います。会話って始まってしまうえば何とかなるものなのですね。

桑原佑典
(開成高等学校 3 年)

地球中の人たちと協力を

「どうせ行かなければならないならば、そうでもなければ行かないようなところへ行きたいと思わない？」8 月の代表合宿で OB の方からそのようなことを言われて、僕はこのインド大会への参加は非常に幸運なのかもしれないと思えました。それまで、実はインドへ行くということへの心配のほうが大きかったです。そんなインドでの 10 日間は今まで生きてきて最も長い 10 日間に感じられました。しかし、振り返るとそれは一瞬の出来事のように思えます。

“Very easy!” 試験が終わった後、他の国の代表の一人が叫びました。僕にとってはそんな簡単ではなかったのですが。それでも銀メダルを獲得できたのは恵まれていたのだと思います。

IESO の醍醐味は、ITFI といった貴重な経験ができることと、それらを通じて他の国の、地学に関心の高い友人をたくさん作ることができることの 2 つです。

知り合った多くの友人たちとは、これからも SNS などを通じて交流を続けていけたらと思います。地学は地球を対象とする科学なので、地学に進もうとすれば、地球中の人たちと協力する必要があると思っています。IESO はその最初の機会であり、この経験を将来に役立てていけるよう頑張りたいと思いました。

安河内健志朗
(栄光学園高等学校 3 年)

ダンスが印象的だった

インドについて当初はテストのことに意識が向いていた。しかし大会は、試験中心というよりは、国際交流をする機会が非常に多く、豪華なお祭りみたいだったので、次第に緊張もほぐれ、思い切って積極的に国際交流をしてみたいと思うようになった。外国の人たちと交流する機会は豊富にあったので、さまざまな国の人と親交を深めることができた。

英語は会話に関しては意外と大丈夫だった。粘り強くはっきりといたいことを伝えようと思えば意外と言いたいことが伝わったのは大きな発見だった。とはいえ他国の代表に比べて自分の英語力はまだまだ不足していたのでこれからもっと磨きをかけていきたい。ITFI や Research program では積極的に議論に参加することはできなかったものの、それを通じてほかの国の代表との親交が深まり、とても興味深い体験だった。

試験の後の夜に中庭でみんなで遊んだことや、最終日のパーティーでダンスを踊ったことは非常に印象的な体験だった。試験はリラックスして望むことができ、銀メダルを取ることができた。しかしこの大会で私はもっと大きなものを得ることができた。国際交流で、普段ではめったに味わうことのできない貴重な体験ができ、視野が世界へと広がった。

八幡幸太郎
(筑波大学附属駒場高等学校 3 年)

2016年の夢、三重県から

立花 義裕 (三重大学)

2016年8月、三重県で第10回国際地学オリンピックが開催されました。地元出身の日本代表、三重県立伊賀高校の熊野君は金メダルを獲得。大会を誘致した三重県知事も喜んでいました。

熊野君は三重県南部の尾鷲市に小学校の時に引っ越して、同じ三重県なのに雨が多いいことにびっくり。そんなことから、気象に興味を持った気象少年です。中学三年生の時、三重県で開催された中高生対象の科学シンポジウムに参加。3年後に地学オリンピックが三重県で開催されることを知り、これまで研鑽を積んできました。熊野君は毎月開かれる三重大学の特別授業に参加し、人類の将来を左右する地球環境問題の基礎分野が地球科学であることを知り、将来はその研究をしたいと考えています。

現在は、地球環境に関連する学科があり、観測船を所有する地元の三重大学の生物資源学部に進むことを考えているそうです。

以上はフィクションですが、3年後の三重大大会の後、同じような記事を書くことになれば最高です。

国際地学教育協会と国際地学オリンピック

久田健一郎(地学オリンピック日本委員会理事長)

今回の大会は、IGEO (国際地学教育協会) の影響が色濃く反映した大会となったことが特徴の一つといえる。そもそも国際地学オリンピック (IESO) は IGEO 主催のもとに実施される毎年開催のイベントであるが、第1回から第4回までが、東アジアと東南アジアで開催されたことからアジアの国際大会の感があつた。

今回は、次期 IGEO 会長となることが予定されている (来年の IGEO 総会で就任) インド・シャンカー氏が本大会の組織副委員長を務めたこともあって、「IGEO 主催」が強く打ち出されていた。また、初めて IESO 規約の改正 (規約改正の手続きの規定と参加者年齢制限の上限修正) が行われ、さらに IESO 規約が定める諮問委員会や調整委員会の活動が始まったことも特筆に値する。加えて、地学領域として、1. 地質・固体地球科学、2. 気象・海洋科学、3. 天文・惑星科学の3本柱が再確認されたことも、今後の IESO の活動を行っていく上で重要である。

これらの動きは、今後 IESO が拡大成長する上で鍵となる変化で、より強固な組織へと促すこととなろう。

.....
Chiorin! リレーエッセイ no. 11

新聞記者と地学の親和性

黒沢 大陸



学生時代の専門は火山学。山を歩いて岩石を採取、顕微鏡での観察や化学分析をしてきた。

噴火や地震の現場を自分の目で確かめたいと記者を志した。ずっと机に座ってする仕事は耐えられそうになく、選挙や裁判の取材もしてみたかった。

「なぜ、地学を専攻して記者なのか」。入社面接で突かれそうな質問には秘策があった。「地学の野外調査は足が勝負、記者も足で稼ぐ仕事だと聞きました！」

文系職場とみられる新聞社だが、理系の記者も珍しくない。物理や化学、農学、原子力工学、医師免許を持つ記者までいる。そのなかで地学系は、実は多数派、朝日新聞だけでも天文や地理も含めて10人はいる。野外調査や試料の分析

は、取材でネタを集めて記事にまとめる仕事と親和性があるようだ。

最近、複数の地質系出身の同僚が入社面接で、私と同じ問答をしていたと知った。秘策ではなく、お約束だったらしい。営業マンや刑事、足で稼ぐ仕事を志すフィールド系の学生の定番なのだろう。

理系記者でも科学の取材ばかりしているわけではない。新聞社は入社後の地方勤務で、事件やスポーツ、政治、行政などあらゆる取材をして基礎をつくる。そこで関心分野を見つけ、専攻とは全く違う分野の専門記者になる人も多い。

今は災害系の取材が中心だが、私が最もはまった仕事は選挙だった。当落をかけた人間模様や集票作戦など醍醐味が満載。ネットやテレビを通じて流す当選速

報は、有権者や陣営の取材というフィールドワーク、過去の得票、世論や出口調査の結果のデータ分析が必須、まさに学生時代に鍛えられたことだった。

つぶしがきかないと思っていた地学、実は応用範囲が広いのかも知れない。

.....
くろさわたいりく。朝日新聞記者。1963年長野県生まれ。茨城大学理学部研究科修了。国内外の災害現場、選挙、鉄道、気象庁、文部科学省などの取材を経験。科学医療部デスクを経て2012年から編集委員。企画記事の「災害大国」シリーズなどを担当。ツイッター ID @k_tairiku

NPO 法人地学オリンピック日本委員会
ニュースレター Chiorin! (no. 11)
平成 25 年 11 月 ## 日発行
発行人: NPO 法人地学オリンピック日本委員会広報部会
編集長: 萬年一剛 (広報副主査・神奈川県温泉地学研)
〒113-0032
東京都文京区弥生 2-4-16 学会センタービル 3F
印刷所: あしがら印刷